

## <メディアウオッチ> 朝日新聞「渡辺恒雄インタビュー」の気になる点

上出 義樹

朝日新聞が11月28日付朝刊に掲載した読売新聞グループ本社会長・主筆の渡辺恒雄氏へのインタビュー「独裁者と呼ばれて」は、巨人軍の「清武の乱」問題にとどまらず、読売新聞の社論や、渡辺氏と政治との関係などにも踏み込んだ内容で、なかなか読みごたえがあった。ただ、一つ気になる点があった。

### 「新聞人の政治活動」は許されるのか

それは、2007年の「大連立」構想で渡辺氏が当時の福田康夫首相と小沢一郎民主党代表の仲介をした問題をはじめ、政治と報道の関係について、せっかくいろいろ質問していながら、「新聞人は政治の当事者になっていいのか」という肝心な問題に触れていないことだ。

今回のインタビューで渡辺氏は、大連立について「僕1人でやったわけじゃないが、まだ真相は言えない」と語った後、「政界との距離があまりにも近くないですか」との質問に、「読売新聞の社論実現のために、内閣に知恵を授けるのは正義」「野田佳彦首相は、うちの社論に80%近い感じがする」などと応じ、あけすけに政治との関わりを認めている。しかし、米国などには「ジャーナリストは当事者になってはいけない」との大原則がある。

### 業界のドンに自らの「ルール違反」質問せず

日本でも、元共同通信編集主幹の原寿男氏が、自著「ジャーナリズムの可能性」（岩波新書 2009年刊）の中で、「大連立」工作への渡辺氏の関与は、「現役新聞人による政治活動」であり、渡辺氏が日本新聞協会会長時代の2000年に改訂された「新聞倫理綱領」にも違反することを指摘。「新聞協会長という日本のジャーナリズムを代表する経歴を持った人物」が、自ら作ったルールを破った大きな問題であるにもかかわらず、「新聞や放送が大勢として、厳しく批判していない」として、渡辺氏とマス・メスメディアの双方を指弾している。

朝日新聞も、「大連立」報道では「新聞界のドンに甘い」と、原氏から批判された。今回のインタビューでも、「新聞人の政治活動」が、自ら作った「新聞倫理綱領」に違反しないかどうかについては質問していない。なぜか、もうひと押しが足りなかった。

（かみで・よしき） 北海道新聞社で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在、フリーランス記者。上智大大学院（新聞学専攻）在学中。